杜甫の研究

黒川洋 著

黑川洋一著

〔東洋學叢書〕

杜甫の研究

刊行　創文社

黒川　洋一（くろかわ・よういち）
1925年，廣島縣に生まれる．京都大學卒，
現在，大阪大學教授．
〔著書〕「杜甫」上下（岩波書店），「杜甫」
（筑摩書房），「杜詩とともに」（創文社）他．

〔杜甫の研究〕

昭和五二年一二月一〇日　第一刷發行
昭和五九年一二月一〇日　第二刷發行

定價六五〇〇圓

著者　黒川洋一

發行者　久保井理津男
東京都千代田區一番町一七―三

印刷者　山田隆
東京都青梅市根ケ布一―三八五

發行所　株式會社　創文社
東京都千代田區一番町一七番地
〒102　電話東京二六三―七一〇一（代表）
振替東京二―九二四七二

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

精興社印刷・橋本製本

3397-192160-4226

序

本書は、杜甫について書いてきた文章のうちより、その主なもの二十篇を選んで收錄する。最初の文章は、昭和三十一年四月、京都大學の『中國文學報』第四册に揭載された「『秋興八首』序說」であり、もっとも新しいものは、この夏から秋にかけて執筆した「『又呈吳郎』の詩について」、「杜甫家族考」、「杜詩『幽興』考」、「『風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻』の作時について」の數篇である。その間、指折り數えれば、滿二十年の歲月が流れていることになる。感慨なきを得ない。杜甫について書いたものとしては、ここに收めるもののほかに、岩波書店から『中國詩人選集』の一つとして刊行した『杜甫』上下二册と、今は亡き鈴木虎雄先生のお手傳いとして世に出した岩波文庫本の『杜詩』八册と、筑摩書房から『中國詩文選』の一册として刊行した『杜甫』がある。これらがこの二十年間の杜甫に關するわたしの仕事の中の主要なものである。二十篇の文章は、そのつどつどの興味に從って書いたもので、もとより一貫した構想を持つものではない。このたびそれらをまとめて一書となすにあたり、內容の上から試みに六つの章に分け、一つの章に何篇かの文章を配置し、全體としてのまとまりを持たせるように配慮した。これらの文章は、最近書いた數篇を除けば、他は一度すでに活字になったものであるが、一昨年の暮れから昨年の夏にかけて、古い文章を根本資料にさかのぼって再檢討し、全篇にわたって大幅、小幅の修正を施している。したがって、これらの文章は古いものの寄せ集めではなく、今のわたしの考えを述べたものであるといってよい。わたしが、杜甫の研究に從うようになったのは、京都大學の學生であったころ、吉川幸次郎先生の杜詩解釋に刺戟を受けたことに始まるが、以來、先生から受けた學恩は量り知れぬものがある。この

書物が、杜詩研究の上になにがしかの貢獻をするところがあるとするならば、多くを先生に負うといわねばなるまい。また、年來の研究をまとめるようにとおすすめ下さったのは小川環樹先生であり、出版を斡旋して下さったのは同學の清水茂教授であった。もしお二人のお力添えがなければ、本書はまたこのような形での成立を見なかったであろう。兩先生ならびに清水教授に對して深い感謝の意を表したい。

昭和五十二年九月

黑川洋一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序……三
第一章　文學的考察……三
一　詩人としての自覺……三
（附錄）唐代における詩の傳播について……三三
二　杜詩の象徴性とその哲學……二七
三　杜甫における李白の意味……四四
第二章　作品の研究……六九
一「崔氏東山草堂」詩の作時について……六九
（附錄）芭蕉の「秋深き」の句と、杜甫の「崔氏東山草堂」の詩について……八〇
二「秋興八首」序說……八四
三「又呈吳郎」の詩について――「卽防遠客雖多事、便插疏籬却甚眞」考……一一六
四「登岳陽樓」の詩について――「吳楚東南坼、乾坤日夜浮」考……一三五
五「風疾、舟中伏枕書懷、三十六韻」の作時について……一六一

第三章　杜甫と佛教……一五五
一　杜甫の佛教的側面……一五五
二　杜詩における摩訶薩埵の投影……二〇〇
三　「秋日、夔府詠懷、一百韻」における「七祖禪」についての考察……二二五
第四章　杜詩の發見……二三五
一　中唐より北宋末に至る杜詩の發見について……二三五
二　「唐書」杜甫傳中の傳說について……二八〇
三　王洙本「杜工部集」の流傳について……三一一
第五章　日本における杜詩……三三五
一　日本における杜詩享受の歷史……三三五
二　芭蕉文學における杜甫……三五七
三　島崎藤村における杜甫――「千曲川旅情の歌」を中心にして……三七九
第六章　雜　考……三九九
一　杜詩「幽興」考――杜甫の自然觀への手がかり……三九九
二　杜甫と藥草――「同谷七歌」黃精考……四一〇

三　杜甫家族考……四三四
初出一覧……四六四
あとがき……四六七

杜甫の研究

第一章　文學的考察

一　詩人としての自覺

一

われわれは今日、杜甫や李白を呼んで詩人といっている。しかしながら、杜甫や李白らを詩人と呼ぶときの詩人という意味は、島崎藤村や萩原朔太郎らを詩人と呼ぶときのそれとは、かならずしも同一ではない。というのは、今日の詩人は、詩を職業とする人、もしくは他の仕事に從事していたとしても、詩を作ることを人生の究極の目的とする人たちのことであるが、杜甫や李白らは、詩によって生活していた人でもなければ、また詩を作ることを人生のもっとも重要な目的としていた人でもないからである。詩人という職業が成立するためには、印刷術の發達と、詩を享受する多くの人たちが必要であるが、中國においてそうした條件が整うのは、十二世紀、南宋以後のことであり、唐代にはそうした條件はまだ成熟してはいなかったといってよい。(1)

そうした時代において、詩をもって生活するとすれば、宮廷詩人となる以外にはその方法がなかったわけであるが、杜甫は宮廷詩人であったことはない。李白は一時、玄宗の宮廷に仕え、玄宗のために詩を作っていた時期があるが、それもほんの一時期のことであり、生涯そうした地位にあったわけではない。杜甫にせよ、李白にせ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

よ、その志すところは政治の上にあり、詩の上にはなかったといえる。「君を堯舜の上に致し、風俗をして再び淳ならしめん」（致君堯舜上、使風俗再淳）とは、失業中の杜甫が韋濟なるものに對してその平生の抱負を述べた詩の一節であるが、杜甫にあっては政府の一員として政治の場に活躍したいというのがその素志であり、詩はその素志を述べるための手段であったにすぎない。「京より奉先縣に赴くときの詠懷、五百字」（自京赴奉先縣詠懷、五百字）にしても、「北征」にしても、杜甫は一般の多くの讀者を豫想して作ったわけではない。それはごく限られた少數の人、ときには自分を理解してくれそうなただ一人の人に向かってその志を披露しているにすぎない。(2)

二

では、杜甫には詩人としての自覺がなかったのかといえばそうではない。杜甫にも詩人としての自覺はあったと考える。少なくとも晩年の杜甫には、そうした自覺があったと、わたしは考える。晩年の詩のいくつかには、そう思わせるふしがある。

杜甫が、その晩年、四川省の東端にある夔州という田舍町に暮らしていたころの詩に、「詠懷古跡」という五首の七律の連作がある。それは、杜甫が夔州周邊の古跡について、その感慨を述べたものであるが、その第三番目の詩は、夔州の東、湖北省秭歸縣にある王昭君の遺跡についての詠懷である。

王昭君というのは、紀元前一世紀のころ、漢の時代、漢蕃和親のために匈奴の酋長のもとに嫁がせられた宮女の名であり、この女性のことについては、「漢書」の元帝紀や、匈奴傳に記事がある。それによると、元帝のとき、匈奴の虖韓邪單于という酋長が入朝し、漢朝の壻とならんことを請うたので、元帝は王昭君という宮女を單于に賜わった。匈奴に嫁した王昭君は單于とのあいだに一子をもうけたが、單于の死後、別腹の子が新單于とな

るに及び、匈奴の風習に従ってその妻となり、さらに二人の女の子を生んだという。以上が「漢書」に見える記事であるが、この王昭君の事跡は、その後だんだんと尾ひれが附加されて、彼女はしだいに悲劇のヒロインに仕立てあげられていった。そうした附加のうち、もっとも名高いものは、王昭君が匈奴に送られたのは、王昭君がその美貌をたのんで、畫師にわいろを贈らなかったために醜く畫かれたことによるという「西京雜記」に見える話である。また、王昭君は胡地にあって、元帝の寵を得られなかったことを怨み、故郷を思い慕って、「怨曠思惟の歌」という詩を作ったという話と、單于の死後、自分の實の子の妻となることを拒否して自殺したという話とは、「琴操」に至ってはじめて附加されたものである。(3)

そうした傳説をふまえて、この杜甫の詩は歌われているわけであるが、まず詩を讀んでみよう。

羣山萬壑赴荆門	羣山萬壑　荆門に赴く
生長明妃尙有村	明妃を生長して尙お村有り
一去紫臺連朔漠	一たび紫臺を去れば朔漠連なり
獨留青塚向黃昏	獨り青塚を留めて黃昏に向こう
畫圖省識春風面	畫圖に省て識らる春風の面
環佩空歸夜月魂	環佩　空しく歸る夜月の魂
千載琵琶作胡語	千載の琵琶は胡語を作して
分明怨恨曲中論	分明に怨恨を曲中に論ず

「羣山萬壑の荆門に赴くところ、明妃を生長せる村の尙お有り」羣山萬壑、すなわち山々谷々が湖北の荆門山のほうへとなだれ走るその途中の山あいに、王昭君の生まれたと傳えられる村が今でも殘っている。明妃とは、王昭君の別稱であり、その生地というのは、湖北省秭歸縣の昭君村とよぶ村である。

選ばれて後宮の人となった彼女を待ちうけていた運命は、まことに酷薄なものであった。「一たび紫臺を去れば朔漠連なり、獨り青塚を留めて黃昏に向こう」紫臺とは漢の宮殿の名である。青塚とは昭君の墓のことであるが、それをそう呼ぶのは、北邊の草はみな白っぽいのに、昭君の墓のほとりの草のみは青々としているためであるという。昭君は匈奴に送られるべく漢宮を立ち去ったが、その前途に廣がるものは北方の砂漠であった。そして、胡地にその不幸な生涯を終えた彼女は、ひとり青塚をとどめて、おし迫る夕やみを前にして立っている。

王昭君の怨みを、別の面からさらに歌うのが次の聯である。

「畫圖に省て識らる春風の面、環佩もて空しく歸る夜月の魂」畫圖は醜く畫かれた彼女の肖像畫であり、環佩は婦人の腰に帶びる一種のアクセサリーである。昭君は生前その美貌を醜く畫かれた繪によってのみ元帝に知られたにすぎず、彼女の怨みの魂は月夜に乘じて環佩を鳴らしつつ、空しく故郷へ歸ってくるという。月夜に昭君の魂が故郷に歸ってくるというのは、杜甫の想像によるものか、あるいは夔州のあたりにそうした言い傳えがあったものか、諸書には見えぬことがらである。

昭君の怨みを歌う主題は、最後の聯に至ってはっきりとことばの表面に躍り出す。

「千載の琵琶は胡語を作りて、分明に怨恨を曲中に論ず」昭君は胡地にあって、望郷の悲しみをびわの曲に託したとされるが、そのびわの曲を聞けば、さながら彼女が外國語をしゃべりつつ、あきらかな怨恨をその曲の中で述べ立てているかのごとくである。「胡語を作る」というのは、胡地にあって母國語を忘れたことを意味する

が、それは胡地にその生涯を終えた昭君の怨みをいうことばとして、はなはだ巧妙である。

ついでにいえば、この詩はきわめてリズムの美しい詩であり、語の終わりのひびきを同じくする疊韻の語と、語の初めの音を同じくする雙聲のことばが多く用いられている。現代の中國音でのこの詩の讀み方を示せば次のごとくである。

qun shan wan huo fu jing men
sheng zhang ming fei shang you cun
yi qu zi tai lian shuo mo
du liu qing zhong xiang huang hun
hua tu sheng shi chun feng mian
huan pei kong gui ye yue hun
qian zai pi pa zuo hu yu
fen ming yuan hen qu zhong lun

羣山（qun shan）、朔漠（shuo mo）、胡語（hu yu）、怨恨（yuan hen）は、疊韻のことばであり、それに對して、黄昏（huang hun）、省識（sheng shi）、空歸（kong gui）、琵琶（pi pa）は雙聲のことばである。かく雙聲、疊韻のことばを並べ連ねることにより、杜甫は一つ一つの事態を確かめ、念を押しつつ、王昭君の怨みを讀者の心に語りかけんとするかのごとくである。

三

詩の意味は、おおよそ以上のごとくであるとして、この詩の終わりの聯の解釋については、少しく問題がある。

私はかつて舊著「杜甫」上册（岩波書店「中國詩人選集」）において、この終聯二句を次のように說いたことがある。「千年後の今日も琵琶語りは蠻族のことばをまじえながら、彼女に代わって怨みのこころをはっきりと曲中にのべたてている。」この解釋は、琵琶を王昭君の作ったびわの曲とはせずに、王昭君の物語を仕くんだびわ語りとして解したものである。

私がこの二句をそう解したのは、單なる思いつきであったわけではない。それにはいささかの根據はあったのである。その根據というのは、王昭君の物語を仕くんだ紙芝居のようなものが、唐代には廣く行なわれていた形跡があることである。いわゆる「昭君變文」とよばれるものがそれである。變文というのは、一種の繪說きであるが、王昭君の物語を仕くんだこの「昭君變文」を、街頭に立って物語っていた女があったことを歌った詩も今に傳わっている。それは唐末の人と推定される吉師老なるものの「蜀女が昭君變を轉るを看る」（看蜀女轉昭君變）という詩である（「全唐詩」七七四）。それにはいう、

妖姬未著石榴裙　妖姬は未だ石榴の裙を著けず
自道家連錦水濆　自ら道う家は錦水の濆に連なると
檀口解知千載事　檀き口は解く千載の事を知り
清詞堪歎九秋文　清詞は九秋の文を歎くに堪えたり
翠眉顰處楚邊月　翠眉を顰むる處は楚邊の月なれど
畫卷開時塞外雲　畫卷の開く時は塞外の雲あり
說盡綺羅當日恨　綺羅當日の恨みを說き盡くし

昭君傳意向文君　　昭君は意を傳えて文君に向こう

最後の句の文君とは、四川をその出生地とする漢の司馬相如の妻の卓文君のことであるが、ここでは王昭君の變文を物語る蜀女、つまり四川出身の女を指していると讀まれる。

唐のころ、王昭君の變文を語る者があったことは、この詩の他に中唐の王建の「蠻妓を觀る」（觀蠻妓）という詩（「全唐詩」三〇一）によっても知ることができる。それには次のごとくにいう。

欲說昭君斂翠蛾　　昭君を說かんと欲して翠蛾を斂め
清聲委曲怨于歌　　清聲は委曲にして歌に怨みあり
誰家年少春風裏　　誰が家の年少ぞ春風の裏
拋與金錢唱好多　　金錢を拋ち與うれば唱い好すこと多き

王建の詩には蠻妓といい、吉師老の詩には蜀女というが、いずれにせよ質素な身なりの女が、街頭に畫卷を開きながら、取り圍む民衆を前に、王昭君の物語を說唱していたことを、これらの詩はものがたっているといえよう。わたしがかつて「千載の琵琶は胡語を作して、分明に怨恨を曲中に論ず」という一聯を、昭君の悲劇を語るびわ語りが、ときに蕃語をまじえながら、昭君に代わってその怨みを今に述べ傳えていると解したのは、この吉師老や王建の詩を頭においてのことであった。

しかしながら、この解釋はおそらくは正しくない。なんとなれば、唐代の變文の說唱が、びわの伴奏を伴って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com